

「帰省」

とーい

高速バスを降りると、目の前に果樹園がある。そばに即売所があつて、すいか、メロン、桃が並んでいる。

乗り継ぎのバスまで、時間があつた。

バス停のベンチに腰かける。空には大きな雲が浮いていた。道路に往来はない。蝉の鳴声が聞こえる。

しばらくして、バスが来た。

客は無い。アナウンスが車内に空しく響く

途中、名前だけ残る工業団地を過ぎ、交通安全と書かれたアーチを抜ける。降りると、懐かしい匂いがした。

「ただいま」

「よく帰ってきたこと」

一年ぶりに見る母は元気である。

荷物を置き、仏壇へ向かった。盆で、いろいろの供物がある。

手を合わせていると、

「一年は早いね」

台所から母の声が聞こえる。

「お父さんは」

「刺身を買いにね、食べさせるんだって」

「いいのに」

「嬉しいのよ、お父さんも」

言いながら、母はすいかを持ってきた。

「最近、どうなの」

「どうって、まあいろいろかな」

すいかをかじりながら答える。

「やっぱり、田舎のすいかは甘いね」

「いくらでもあるからね」

母はほほえんでいる。皿に散った種に虫が一匹止まり、すぐに飛んでいった。

「よく帰ってきた。乾杯」

父の音頭でグラスを合わせた。ビールは冷たく、父は一気に飲み干す。

「早いんじゃないの」

わたしが言うと、

「ほら、恵美も心配していますよ」

「大丈夫だ。恵美、注いでくれ」

つぐと勢い良く泡が立ち、あふれそうになった。父は慌ててグラスに口を近づける。

「こういうところ、恵美は全然変わらないのね」

「普段はおっとりしているのに、こういうところは相変わらずせっかちな」

父の言葉にみんなが笑った。

テーブルには御馳走が並び、父の買って来た刺身もある。食べなさい、はじめこそ勧めてくれたけれど、食べるのは父ばかり。母はたまごやきを、わたしは浅漬けを食べている。

「明日、墓参り終わったら、温泉でも行くか」

ビールを飲みながら、父が言った。

「墓場の片付けは明後日だし、午後、家を空けたって御先祖様も許してくれるだろう」

「そうね、恵美はどう」

母も応じる。ふたりで決めていたのだろう。

「え、うん」

大人しく答え、

「どこに行くの」

「街の向こうに、新しいのが出来たんだよ。掘ったら出たんだ」

「結構、混んでいるのよ」

「そうなんだ」

答え、残りのビールを飲み干す。

「この間、山の帰りに入ってきたが、湯も出てよかった」

そう言っつて、父もビールを飲み干し、母に新しい瓶を催促する。はいはい、と母は台所へ向かう。

「やっぱり、恵美がいるといいな」

「そんな変わらないでしょ」

笑っている父の顔には去年よりしわが見えた。

ふたりとも年を取った。わたしだけ好き勝手に生きている。よその親ならいつまで夢を見ているんだ、としかるのに。

最後の一本よ、と母がビールを持ってきた。

わたしが栓を抜き、父のコップに注いだ。今度はこぼれない。終わると父が瓶を持ち、わたしのコップに注いだ。

食事を終え、父は寝転んでいる。わたしと母は後片付けをし、台所でビールをもう一本だけ空けた。

その間に父は寢床に入り、母も鳩時計が十二回鳴いたころに寝た。

わたしも二階の自分の部屋へ行く。

都会と違って、カーテンを閉めなくてもよかった。あかりを消すと、空が見えた。無数の星が散っている。

「田舎にいるときぐらい、ケイタイの電源切ろうかな」

夜空を見ていてふと思い、携帯電話の電源を切った。

ベッドに潜ると母が干してくれた布団は、いつまでも温かった。

にわたりの鳴声が聞こえる。

寝過ごした。時計は六時半を回っている。

着替えて降りると、母は食事の仕度をしていた。

「おかあさん、ごめん」

謝ると、

「もつと、ゆっくりすればいいのに。とりあえず顔洗ってらっしゃい」

きょうは墓に供える弁当を作らなくてはならない。その他、仏壇の飾りつけなど仕事は多い。

早速、わたしも畑に行き、トマトやとうもろこし、お供えの花などをもいだ。そして、たまねぎの味噌汁などを作る。

とうもろこしを茹でて輪切りにし、弁当に詰めていると、父の拍手を打つ音が聞こえた。母もわたしも仏壇に手を合わせ、線香が燃えつきたところで食事となった。

父は朝から元気で、「今年は早くお参りして、街に行かなくちやな」

と言い、母も、

「九時ぐらいには、行きましょうか」

と、答える。田舎はさすがに早い。

「そんなに急がなくてもいいのに」

苦笑するわたしを見て、

「早く温泉に入って、スーパーで買い物するからな」

父は言い、山盛りのご飯を筋子で頬張った。

九時過ぎ、お供え物と家紋の入った桶を持ち、村の墓場まで歩いた。日差し強い日で、母から畑で使う麦わら帽子を借りた。

途中、何組か村の人々に擦れ違い、墓場まで行くと、入り口にあるお地藏様へは既に多くの供物があった。

「早いね」

つぶやくと、

「みんな早いなだよ」

当然のように父は言った。

自分の家の墓へ行き、台の上に蓮の葉を敷き、弁当を供えた。墓の向こうは一面田んぼ

で、微かに垂れた稲が黄色味を帯び始めている。

本家の墓にも線香を上げ、お菓子やとうもろこし、枝豆などを供える。入り口のお地藏様へも同様にお供えし、墓場を離れた。

数年前、廃線になった駅の近くに、温泉はあった。以前、炭鉱と街をつないでいたこの路線も、廃坑とともに乗客が減った。耳をすませば、ディーゼル列車の力強い音と警笛がいまでも聞こえそうな気がする。

「よく、こんなところに出たね」

わたしはたずねた。

「マンション建てるつもりで掘っていたら出たんだ」

「本当、運が良いわね」

両親は言い合い、車のトランクから洗面道具を出している。

温泉は健康ランドのような外見で、風情はなかった。しかし、この辺の人には目新しく、安価で、気を使わないのがいいのだろう。

湯は透明で、最初、温泉かいぶかしかったけれど、芯まで温まった。サウナも無料で、水風呂との間を母と何度も往復した。

出て来ると、父はマッサージチェアにいて、全く長いな、と笑った。

ごめん、母と謝って、わたしは缶ビールを買い、父に渡した。

わたしが運転するから、と言うと、父は一瞬迷ったけれど、うれしそうに缶ビールの栓に指をかけた。

スーパーは街の中心にあった。大手資本と地元の2つのスーパーがあり、それぞれ頑張っている。

一軒、昔からあった百貨店は廃業していた。スーパーまでの道すがら通り過ぎると、シヤッターが下りていた。高校のころ、上の食堂で友達とみつ豆をよく食べた。父が言うには街中にあるから駐車場が小さく、客が減ったらしい。

わたしたちが行くのは地元のスーパー。買い慣れているし、新鮮な魚が手に入る。

着くと、

「用事があるから、ふたりで買い物して」

父は言っただけだったので、母と買い物をした。

夕食の材料や職場へのお土産を買い待ち合わせ場所にいと、父が来た。ビニール袋を手に入れている。

「何か買ってきたの」

たずねると、

「後のお楽しみ」

と笑って、

「アイスクリーム食べるか」

「うん」

「母さんは何がいい」

「私はバナナ」

「恵美はどうする」

「見てから決める。一緒にいこうよ」

答えて、たこ焼き屋の隣にあるアイスクリーム屋へ向かい、それぞれアイスを買って、休憩コーナーで食べた。

「しかし、もう明日帰るんだろ」

アイスクリームをかじりながら父が言う。

「仕事だから、仕方ないのよね」

問うように母は言い、

「うん。もっと、ゆっくりしたいけれど」

それしか言葉が出なかった。

来年までふたりの顔を見られないのかな、ぼんやり考えていると、何かしなければと思
った。

「ちよつと待ってて、すぐに終わるから」

両親を残し、買い物に行った。目当てのものはすぐ見つかり、戻ってくると、

「今度は早いな」

父が言うので、

「お父さんの子だもの、本当は早い子なんだよ」

笑いながら、返した。

帰り道、窓を開けると涼しい風が入ってきた。髪はかすかになびき、真っ赤に焼けた空
の下を、車は軽快に駆けていく。

様子を見計らって、助手席の父に話しかけた。

「お父さん、髪染めてあげようか」

「恵美が染めてくれるのか」

驚いた口調である。

「薬はどうしたんだ」

「さっき買ったよ」

「また風呂に入らなくちゃならないだろう」

面倒くさそうな父に、

「おとうさん、染めてもらったら」

母は言い、

「それじゃ、帰ったら頼むかな」

父が返したので食事前に染めた。

父の頭をまじまじと見たことはなかった。

髪は薄くないが、白髪はふえた。苦労したのだろう。いまも、わたしのことで苦労している。そう思うと情けなかった。せめてもと、丁寧に染めた。何度もわけて、細かく染めた。

染まるのを待っている間、わたしたちに会話はなく、台所から包丁の音だけが聞こえた。突然、父が話した。

「帰って来られないのか」

驚いた。わたしはあぐらをかいている父の背中を見つめている。久々に見る父の背中は昔と変わらず大きかったが、少し丸まっている。

「どうだ」

父が静寂を破る。

「ごめん。まだ帰るわけにはいかないよ」

父は微動だにしない。

「もう少しだけ、がんばりたい」

「そうか」

「ごめん」

「父さんたちなら、大丈夫だ」

静かに父は続ける。

「恵美はしっかりと考えているだろう。なに、失敗したら、もう一度頑張ればいいんだ」

父の言葉が胸を締め付ける。気付かれないよう、静かに泣いた。

「花火でもするか」

父が言った。

「今日の御礼だ。さつきスーパーで買ったんだ」

わたしは小さくうなずいた。

翌日、両親がバスターミナルまで送ってくれた。帰省のころは客が多く、始発のターミナルから乗ったほうがよかった。

一時間ほど走り、ターミナルに着いた。

すでに列が出来ていて、わたしも切符を買って、並んだ。

ほどなくバスが来た。窓側の席が空いていて、そこに決めた。荷物を棚に置いて座ると、両親が見える。

それでは出発します、運転手のアナウンスが聞こえた。

わたしは両親に手を振った。父は片手を挙げ、母は手を振りながら頬を指でぬぐう。

いつしか、ふたりの姿が滲んだ。

バスはゆっくりと走り出し、しばらくして高速道路に乗った。三時間ほどで終点に着いた。

新幹線に乗り込むと家族連れが多く、車内は賑やかである。

列車は定刻に出発し、速度を上げる。わたしは携帯電話の電源を入れた。